

### 【短報】種子島，北大東島におけるシバオサゾウムシの記録

シバオサゾウムシ *Sphenophorus venatus vestitus* Chittenden, 1904 は北米原産のシバ類の害虫であり、1979年7月に沖縄島で発見されたのが日本における最初の記録である(尊田, 1980)。その後、北海道を除く日本各地で発見されており外来種として定着している。南西諸島では奄美大島、沖縄島、西表島から記録されている(東ら, 2002; 山本・伊藤, 2009)。筆者らは種子島と北大東島から本種を得ているため、ここに報告する。

8 exs. (図1)、  
沖縄県島尻郡北大東村(北大東島)中野, 25.949°N, 131.296°E, 43 m, 13. VI. 2017, 有本採集・保管; 3 exs., 鹿児島県熊毛郡南種子町(種子島)中之下前之浜近く, 30.364°N, 130.901°E, 5 m, 15. VII. 2017, 有本・伊藤採集・保管。

北大東島では、ホテルの敷地内に張られている芝生から得られた。種子島では、砂浜の内陸側にある駐車場周辺の芝生上に見られた。両島への侵入経路は不明だが、各施設が造られる中で侵入したのではないかと予想する。

末筆ながら、分布記録の確認に協力していただいた辻尚道氏(九州大学)に厚くお礼申し上げます。

#### 引用文献

- 東 清二・屋富祖昌子・金城正勝・林 正美・小濱継雄・佐々木健志・木村正明・河村 太, 2002. 琉球列島産昆虫目録. 570 pp. 沖縄生物学会.  
尊田望之, 1980. 各地で話題の病害虫. 植物防疫所病害虫情報, 2: 6-7  
山本周平・伊藤玲央, 2009. 西表島に侵入したシバオサゾウムシ. 甲虫ニュース, (168): 8.

(有本晃一 569-1125 大阪府高槻市紫町1-1  
JT 生命誌研究館)  
(伊藤玲央 大分県大分市)

### 【短報】シラフクモゾウムシの京都府からの初記録と寄主植物について

シラフクモゾウムシ *Neomecopus subarmatus* Hustache, 1921 は、本州・九州に分布し、稀(森本, 1984)とされている。筆者は従来記録のなかった京都府において本種を採集しているので報告する。

なお、本種は「京都府レッドデータブック 2015 別冊京都府自然環境目録」(京都府自然環境保全課, 2015)に記録がなく、関西甲虫談話会会員数名の方に京都府における記録について照会したが、情報が得られなかったため京都府未記録と判断した。

1♀, 京都府綾部市睦寄町, 21. VI. 2016, 筆者採集・保管, 的場績同定, 2017;  
1♀, 同所, 18. V. 2017, 筆者採集・保管, 的場績同定, 2017 (図1)。

本種を採集したのは同じ場所の同じニガキ *Picrasma quassioides* の高木で、長竿の網で掬って得られた。このニガキの高木は、丹後・丹波虫の会会員の鶴田健一氏にエゾナガヒゲカ

ミキリの採集ポイントとして教えていただいたものであるが、時期的なものもあってか目的のカミキリは採集できなかったものの、2年連続で本種が得られた。本種は、ニガキの伐採木より多数採集した(的場, 2008)とのことや、東京都八王子市での採集例ではニガキの葉裏に止まっていたものを採集した(中村, 2009)とのことであり、筆者が網で掬って採集したのもいずれもニガキの生木の枝先である。したがって、本種の寄主植物はニガキであることを示唆しているものと思われる。

末筆ながら、本種の同定と雌雄の判定、本稿をご校閲いただいた的場績氏、および採集ポイントと樹種名をご教示いただいた鶴田健一氏、ならびに本種の京都府における採集例を調べていただいた関西甲虫談話会会員諸氏に心からお礼申し上げます。

#### 引用文献

- 京都府自然環境保全課, 2015. 京都府レッドデータブック 2015 別冊京都府自然環境目録. 415 pp.



図1. シバオサゾウムシ, 全形, 北大東島産。



図1. 京都府産シラフクモゾウムシ。

的場 績, 2008. ゾウムシ雑誌 27, KINOKUNI, (74): 14-16.  
 森本 桂, 1984. ゾウムシ科, 林 匡夫・木元新作・森本 桂,  
 (編), 原色日本甲虫図鑑 (IV): 269-345, 53-68pls. 保育社,  
 大阪.  
 中村裕之, 2009. 東京都でシラフクモゾウムシを採集, 月刊  
 むし, (464): 47.

(黒田悠三 624-0851 舞鶴市大内野町 47-3)

### 【短報】ホソキボシアオゴミムシ幼虫の採集記録と生態等について

ホソキボシアオゴミムシ *Chlaenius (Lissauchenius) rufifemoratus* (Macleay, 1825) は, 日本では大隅半島と屋久島以南の南西諸島に分布するアオゴミムシで, 笠原 (1984) により, 従来チュウジョウアオゴミムシ *C. (L.) chujoi* Jedlicka, 1946 として報告されていたものは本種と同定されている。

本種は顕著な美麗種で, 個体数が少ないことなどから比較的多くの報告や論文に取り上げられている。成虫は他のアオゴミムシ類と異なり樹上性で, 葉上などから採集されることが多い (笠原, 1980; 黒沢, 1975; 松本, 2000)。

筆者は与那国島において本種の幼虫を採集し, 成虫を羽化させたので若干の生態観察と合わせて

報告する。

#### 採集データ

1♂ 幼虫 (図 1), 沖縄県与那国町宇良部岳 (標高 130 m), 24. IV. 2017, 筆者採集・飼育。

宇良部岳の登山道沿いをビーティングしていたところ, 山頂手前約 1,000 m 地点の地上 1.5 m ほどのススキの葉上から幼虫 2 頭が落下した。採集時はいずれも終齢と思われた。数センチ角のプラスチック容器に入れて鱗翅目の幼虫を与えたが, 1 頭は餌として与えた幼虫が吐いた糸に絡まって死亡してしまった。もう 1 頭の個体の腹部は長く伸び, 体長 13 ~ 14 mm ほどあって満腹状態と思われた。しばらくは摂食しなかったが約 3 日後, 幼虫は自分と同等かそれ以上の大きさの鱗翅目幼虫 1 頭を捕食した。

本種は与那国島では成虫もススキの葉上で生活し (笠原, 1980), 2016 年には筆者も同じく宇良部岳の山頂から 480 m 手前の同様の環境 (標高 180 m) で成虫を採集している。この時はタイワンアトボシアオゴミムシ *C. (L.) bimaculatus lynx* Chaudoir, 1856 の幼虫も近くで採集した (須田, 2016)。こちらの成虫は地表で生活するが, 幼虫の生息環境は本種とよく似ているようである。

与那国島で採集活動をされておられる長瀬正義氏の話では, これら 2 種の幼虫は春から初夏にかけてビーティングで見かけることがあり, タイワンアトボシアオゴミムシの方がより多く見られるとのことであった。

今回, ホソキボシアオゴミムシは同日に同町久部良方面で成虫 1♂ も採集されており, 羽化時期には幅があるものと考えられる。また, タイワンアトボシアオゴミムシは 2017 年 4 月 24 日から 28 日にかけて同町各所で成虫を採集しているが, 2016 年の羽化脱出日は 6 月 4 日であったことから, 羽化時期にはやはり幅があることがわかる。



図1. 幼虫 (4月27日) .



図2. ヒラタアブを摂食中の成虫 (5月18日) .



図3. 鱗翅目幼虫を摂食中の成虫 (5月19日) .